

品川宿の宿並模型

—江戸・品川へのプロローグ—

お店の中までのぞいてみよう

品川宿は、鎌倉時代からあったとされていますが、戦国時代には目黒川をはさんだ海岸沿いに南品川宿と北品川宿が形成されていました。江戸時代になり、東海道第一番目の宿場町として定められた後、北品川宿から高輪^{たかなわ}に向かって家並がのびて新町を形成し、享保7年（1722）、この新町が法禅寺門前町^{ほうぜんじ}と善福寺門前町^{ぜんぶくじ}とともに歩行新宿^{かちしんしゆく}として宿に加えられました。新宿の追加によって、品川宿の宿並は、道幅3～4間（約5～7m）、南北に19町40間（約2143m）で高輪町境^{おおいむら}から大井村境^{かいあんじ}の海晏寺門前まで続くことになりました。

品川歴史館に展示されている品川宿宿並模型は、弘化2年（1845）頃の「品川宿宿並図、伝馬役・歩行役図」をもとに、「東海道分間延絵図」などを参考にして、目黒川を中心とした500mを復元したものです。江戸時代後期の家並のため瓦葺きが多くなっています。品川宿の商家は裏面に掲載した表のように、宿場らしく旅籠屋^{しゆくか}や水茶屋^{みずぢや}、食べ物^{はたご}を売る店が多いのが特徴です。店の模型は、葛飾北斎^{かつしかほくさい}や歌川広重^{うたがわひろしげ}らの描いた錦絵^{にしき}や江戸時代に出版された本の挿絵などを参考



▲問屋場の図（『駅通志稿』より）

にして、一軒一軒商売にあわせて店の中まで作られています。ちょっと小さな模型ですが、足下に埋め込んだ宿並図を参考に、品川宿の世界をお楽しみください。

宿場の役所 — 問屋場 —

江戸時代、宿場で人馬^{じんば}の継立^{つぎたて}を行ったのが問屋場^{といやば}です。問屋場では、公用の旅行者のために次の宿場まで荷物を運ぶ馬（伝馬^{でんま}）と人（人足^{にんそく}）を用意しており、品川宿の場合、川崎宿と日本橋に人馬を継ぎ立てました。公用の旅で、あらかじめ決められた人馬の利用は無料でしたが、それ以上の利用は有料で、決められた賃銭^{おさだめちんせん}（御定賃銭）で利用しました。



▲品川宿の宿並模型（本陣付近）



▲品川宿の宿並模型（問屋場・貫目改所）

正徳2年（1712）、品川宿の問屋場には、荷物が定められた重量以内であることを検査する貫目改所が設置され、問屋場と同じ建物に入っていました。

品川宿の商人数〔天保14年（1843）調べ〕

商	人	軒数	商	人	軒数
食売旅籠屋		92	すし屋		9
水茶屋		64	貸ふとん屋		8
古着古道具屋		64	とうふ屋		8
荒物屋		59	小間物屋		8
煮売り屋		44	銭湯（洗湯）		8
質屋		40	薬屋（薬種）		7
酒屋（味噌・醤油）		32	かばやき屋		5
春米屋（精米）		25	ちょうちん屋		3
平旅籠屋		19	呉服屋		2
さかな屋		17	瀬戸物屋		2
餅菓子屋		16	金物屋（鉄物）		2
炭薪（すみ・まき）		16	紺屋		2
八百屋		15	薬湯		2
ろうそく水油屋		12	乾物屋		1
たばこ屋		9	足洗場		1
そば屋		9			
			合計601軒		

(南品川宿名主利田家文書「宿方明細書上帳」より)

▶「品川宿並図、伝馬役・歩行役図」(模型復元部分付近)
△印は伝馬役を指します

△印は伝馬役を指します。

